

## 第11分科会

# 高大連携をどう設計し、学生募集・ 入試・入学前／初年次教育等につなぐか ～連携・接続・移行の今とこれから～

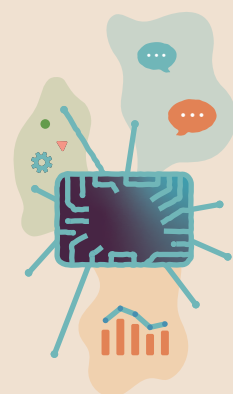
### 報告者

高原 幸治氏 桜美林大学 学長補佐／入学部 部長

山本 以和子氏 京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授

### コーディネーター

井出 大地氏 京都文教大学 入学センター 高大連携オフィス 課長補佐



---

---

## 〈第 11 分科会〉

# 高大連携をどう設計し、学生募集・入試・入学前教育 / 初年次教育等につなぐか ～連携・接続・移行の今とこれから～

コーディネーター

京都文教大学 高大連携オフィス 課長補佐 井出 大地

---

---

## 1. 本分科会のねらい

近年、入試改革や探究学習の必修化を背景に、教育内容の接続という観点から「高大連携」の重要性が一層高まっている。多くの大学で連携協定の締結や出前授業等の取り組みが拡大している一方で、それらが形式的なものに留まり、具体的な志願者確保や入学後の教育的成果に結びついていないという課題も散見される。特に少子化が加速するなか、高大連携をいかに学生募集、入試設計、さらには入学前教育へと戦略的に繋げ、持続可能な組織体制を構築するかは、多くの大学にとって喫緊の共通論点となっている。

本分科会では、2つの講演による先進事例の共有と理論的背景の提示、またそれを踏まえた参加者同士のワークショップを通して、教育と経営の二つの視点から教職協働で高大連携・接続の取組を考え、高校教育から大学教育へのスムーズな移行を達成するための具体的な手法を模索することを目的とした。

また、本フォーラムが「FD・SD フォーラム」へと発展した趣旨を踏まえ、本企画では教育手法の議論に留まらず、これらの事業を組織的に推進するために教職員に求められるマインドやスキル、および専門職の役割についても焦点を当てた。参加者が自大学の課題解決に向けた具体的なヒントと、それを支える教職員の専門性（SD 要素）への理解を深めることを本プログラムの到達目標とした。

## 2. 報告の概要

本分科会では先述した通り、二つのご講演（報告）をいただくことで先進事例及び理論的背景への理解を深めた。桜美林大学学長補佐・入学部長である高原幸治様による「高大連携および学生募集戦略の考え方 ～桜美林大学の取り組み事例より～」と京都工芸繊維大学工芸科学部教授である山本以和子先生による「高校から大学へつなぐ理論と実践 ～トランジションを成功に導く実践デザイン～」の二つである。

高原氏からは、2040年に向けた18歳人口の激減と大学淘汰の現実という厳しい市場予測が提示され、この危機を乗り越える戦略として、高大連携を単なる広報手段ではなく「関係人口（準構成員）の創出」として位置づけることの重要性を提案いただいた。これは、受験生を「評価対象」から「学習主体」へ、入試を「選抜の場」から「育成、関係確認の場」へと転換させるパラダイムシフトである。

その具体的な事例として、探究学習を軸とした高大接続プログラム「ディスカバ！」を紹介いただいた。同プログラムは、大学の教育資源を高校生に開放し、継続的な関与を促すことで、出願前に大学との深い信頼関係を築く「ファンづくり」の役割を果たしている。また、組織体制（Who）の重要性についても言及があり、これらを実現するためには、高校と大学の「通訳」となり得る専門性を備えた教職員の配置や外部人材の活用、つまり学内の役割分担を再構築する必要性が説かれた。またそれら高大連携を入り口とし、入試から入学前・初年次教育までを一貫したストーリーで設計することの重要性が強調された。

続いて山本先生からは、「高大連携」「高大接続」「高大トランジション（移行）」の概念を整理し、高校生をいかに「大学生」へと変容させるかという理論と実践について報告いただいた。

まず、知識の「吸収」を主とする中等教育と、知識の「生産」を目的とする高等教育との間にある、教育目的の構造的な断絶（ギャップ）が指摘された。この溝を埋め、大学教育を受ける準備状態を整えるための「カレッジ・レディネス」の概念が提示いただいた。単なる教科学力の補完に留まらず、学習方略や非認知能力、専門分野への動機付けを含めた総合的な「構え」を、入試から入学前教育を通じて育成することが重要である。

またこれらの具体的な実践例として、同大の「ダビンチ入試」と連動した「ダビンチ・カレッジレディネス・プログラム」が紹介された。講義やグループワーク等を組み合わせ、合格から入学までの期間に大学での学びの作法を体得させる設計である。

### 3. 報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

二つの講演（報告）を受け、後半では「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」、および「高大連携推進に必要なマインドやスキル」をテーマとしたワークショップを実施した。ワークショップは以下の4つのステップで実施した。

- ①自己紹介と自大学の実践共有：事前に作成した取組整理シートを用い、各大学の現状を共有した。
- ②課題の整理と今後の展望：講演内容を踏まえ、自大学の課題や今後取り組みたい実践について、入試から入学前・初年次教育までの「接続」を意識しながら整理した。
- ③教職員のマインド・スキルの検討：課題解決や新たな取組の推進に不可欠な、担当教職員に求められる専門性やマインドセットについて議論を深めた。
- ④全体シェア：各グループで出された意見を共有し、分科会全体での学びの言語化を図った。

本総括では、グループワークで議論された内容について、全体シェアに加え成果物（模造紙）に出された意見を以下の3つのポイントに集約しまとめる。

#### ・高大接続の「一貫性」と「ストーリー」の構築

多くのグループから、高大連携を単なる広報活動に留めず、入試から入学前教育、さらには初年次教育までをつなげる「一つのストーリー」として再設計する必要性が意見として出された。高校での探究学習の成果を大学での学びにいかに接続させ、学生の自律的な学習者への変容を促すかという、教育デザインの重要性が強調された。

#### ・組織的セクショナリズムの解消と情報共有のプラットフォーム

推進上の最大の壁として、部署間の縦割りによる情報の分断が挙げられた。この課題に対し、全部署で「大学教育の全体像」を共有できる会議体の設置や、教学 IR を活用した入試区分別の学修状況のエビデンス共有など、教職員が連携してコンセンサスを形成するための仕組み作りが不可欠であるとの意見が多く出された。

#### ・持続可能な体制を支える SD（専門性とマインドセット）

属人的な取組から組織的な実践へ移行するために、高校と大学の教育目的の違いを理解するマインドセットの醸成や、アドミッション職等の専門人材の配置・育成を求める声が多かった。また、これらを現場の負担増で終わらせないためには、執行部による明確な方針提示と、組織的なインセンティブ設計の重要性が共有された。

最後に、本分科会では30名を超える教職員が、高校と大学の「連携」「接続」「移行（トランジション）」をテーマに学び合い、意見交換を行った。非常に幅の広い取組についてのインプットとそれを踏まえた議論を行ったため、それらを推進するために求められる教職員のスキルやマインドを提案するところまでは至らなかった。一方、各大学における取組やそれら取組をより改善していくためのヒントや具体的なアイデアはそれぞれ持ち帰っていただけたのではと考えている。

今後も、本ワークショップでつながった大学を超えたネットワークやコミュニティにおいて、より活発な情報・意見交換や学び合いを継続していきたい。

# 井出 大地 京都文教大学 入学センター 高大連携オフィス 課長補佐

スライド1

第11分科会 ワークショップ

高大連携をどう設計し、  
学生募集・入試・入学前/初年次教育等につなぐか  
～連携・接続・移行の今とこれから～

講師 桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏  
講師 京都工芸繊維大学 工学科学部 山本以和子先生  
コーディネーター 京都文教大学 高大連携オフィス 井出大地  
(サブファシリテーター 京都文教大学入学センター 戸谷 愛美、森田 二郎、安田 亮介)

スライド2

企画の趣旨

入試改革や探究学習により連携が加速する一方、少子化で競争が激化。  
形式的な協定に留まらず、現場での実質的な連携が求められています。

**教育戦略的な視点**

高校と大学の学びをどう接続するか？  
高校生から大学生へ、スムーズな  
移行（トランジション）をどう促すか？

**経営戦略的な視点**

18歳人口減少の中、定員をどう充足するか？  
入学後のミスマッチを防ぎ、  
中退率をどう下げるか？

↓

教職協働で高大連携・接続・移行を達成するための実践やスキル・マインドを考えます。

スライド3

企画の趣旨

京都文教大学では

**学生募集・高大連携**

探究学習や産学を軸に26校との強固なネットワーク形成を通じた、実質的な教育交流の推進

**入試制度の改革**

探究活動を正当に評価し、意欲ある学生を奨励める「高大接続入試」等の導入

**入学前教育 等**

大学教育へのスムーズな移行を促すブリッジプログラム。高大連携会における情報交換等の実施。

**初年次教育 等**

情報収集をもとにした学生カルテによる個別最適な支援の実施。

高大連携オフィス & 学生募集高大連携委員会の設置  
組織的かつ教職協働で推進する体制の構築

スライド4

企画の趣旨

現場としては手応えを感じつつも課題感・・・

**学生募集・高大連携**

**入試制度**

**入学前教育 等**

**初年次教育 等**

- ・ 高校や高校生にとって意味のある、かつ関心を持つプログラムをいかに開発するか
- ・ 高大連携で接点をもった高校生をいかに志願や入学につなげるか
- ・ 入学前教育や初年次教育等の入学後の教育をどのような視点で設計・実施するか
- ・ 持続可能な形で推進していくためにはどうしたらいいか（教職員の負担増、負担の偏り）
- ・ 組織体制や役割分担、教職員に求められる能力をどう考え、育成すべきか（学生をどのように巻き込むか）

など

→各大学で取り組んでいる内容や抱えている課題は様々

スライド5

企画の趣旨

①講演 「高大連携および学生募集戦略の考え方～桜美林大学の取り組み事例より～」  
桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏

②講演2 「高校から大学へつなぐ理論と実践ー トランジションを成功に導く実践デザイン」  
京都工芸繊維大学 工学科学部 教授 山本 以和子氏

③ワークショップ 「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」  
「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

「先進事例」や「理論」に触れ、それぞれの実践の課題解決を考える。  
またそれらを実現するために教職員に必要なマインドやスキル（専門性）を考える。

小班様のワークショップで  
一緒に学び合う  
コミュニケーション！

スライド6

ご講演①

①講演 「高大連携および学生募集戦略の考え方～桜美林大学の取り組み事例より～」  
桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏

②講演2 「高校から大学へつなぐ理論と実践ー トランジションを成功に導く実践デザイン」  
京都工芸繊維大学 工学科学部 教授 山本 以和子氏

③ワークショップ 「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」  
「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

## スライド7

ご講演②

①講演 「高大連携および学生募集戦略の考え方～桜美林大学の取り組み事例より～」  
桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏

②講演2. 「高校から大学へつなぐ理論と実践ー トランジションを成功に導く実践デザイン」  
京都工芸繊維大学工芸科学部 教授 山本 以和子氏

③ワークショップ 「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」  
「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

## スライド8

ワークショップ

①講演 「高大連携および学生募集戦略の考え方～桜美林大学の取り組み事例より～」  
桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏

②講演2. 「高校から大学へつなぐ理論と実践ー トランジションを成功に導く実践デザイン」  
京都工芸繊維大学工芸科学部 教授 山本 以和子氏

③ワークショップ 「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」  
「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

## スライド9

ワークショップ

①講演 「高大連携および学生募集戦略の考え方～桜美林大学の取り組み事例より～」  
桜美林大学 学長補佐 入学部部長 高原 幸治氏

②講演2. 「高校から大学へつなぐ理論と実践ー トランジションを成功に導く実践デザイン」  
京都工芸繊維大学工芸科学部 教授 山本 以和子氏

③ワークショップ 「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」  
「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

## スライド10

ワークショップ

ワークショップの流れ  
「各大学の特徴を活かした高大連携における課題と今後」、「高大連携推進に必要なマインドやスキル」

<p>① 10分</p> <p>自己紹介 &amp; 自大学の実践共有</p> <p>配布したA4紙と、事前にお送りしたワークシートをご活用ください。</p>	<p>② 20分</p> <p>今後の実践や取組 (課題の整理)</p> <p>自大学の課題や、講演を通して感じた課題を踏まえ、今後どのような実践や取組を進めていきたいか整理します。</p>	<p>③ 20分</p> <p>教職員に必要なマインド・スキル</p> <p>STEP2の課題解決や、取組を進めるために必要な「教職員のマインドやスキル (専門性)」とは何かを検討します。</p>	<p>④ 10分</p> <p>全体シェア (発表)</p> <p>STEP3についてどのような議論があったか、全体にシェアをしてください。 ※グループは10程度</p>
---	---	--	---

## スライド11

ワークショップ

①自己紹介 & 自大学の実践共有 (10分)

お1人、1分半程度で自己紹介、自大学の実践を共有してください。

自大学の実践は事前で作成いただいた、「高大連携・接続・移行に係る取組整理シート」を活用してください。

## スライド12

ワークショップ

②今後の実践や取組 (20分)


自大学の課題 / 講演を通して感じた課題を踏まえ、次年度以降どのような実践や取組を進めていきたいか

まずは個人で考え、黄色の付箋に書き込んでください。

横連紙に貼り、グループ内で共有してください。

作成いただいたワークシートの各取組 (高大連携、入試、入学前教育、入学後の教育) でつながっているものを線でつないでください。線を引けなかった箇所がつながっていない＝分断された取組です。


## スライド 13

ワークショップ 

③課題／今後の実践や取組（20分）  
グループで出た課題解決及び実践・取組を進めるために必要な教職員のマインドやスキル（専門性）を考えてください

- **ピンクの付箋** にマインドやスキルを書き込み、関連する実践や取組の近くに貼ってください。
- マインドやスキル以外に教職協働を推進するために必要な工夫や仕組み、役割分担があればそれも記入してください。
- ④のシェアに向けて整理をしてください。


## スライド 14

ワークショップ 

④シェア（10分）  
グループで出た課題解決及び実践・取組を進めるために必要な教職員のマインドやスキル（専門性）を全体に共有してください


- 1グループ1分程度「議論の中で最も重要だと思ったポイント」を共有してください。

## スライド 15

まとめ 

ありがとうございました！  
それでは高原様、山本先生よりコメントを頂戴いたします。


## スライド 16

まとめ 

学び合うコミュニティへ

是非、名刺や連絡先を交換してからご解散ください！  
「京都高大接続地域ネットワーク（KARN）」の研修・イベントへのご参加もお待ちしております！

長時間の分科会、お疲れ様でした。

 京大文大

スライド1

2025年度 第31回 FD-SDフォーラム「2040年の京都の大学」～我々はどこ教え、学び、働いていくのか～

第11分科会  
高大連携をどう設計し、学生募集・入試・入学前教育/初年次教育等につなぐか  
～連携・接続・移行の今とこれから～

## 高大連携および学生募集戦略の考え方 ～桜美林大学の取り組み事例より～

2026年3月1日  
桜美林大学  
学長補佐・入学部長  
高原 幸治

スライド2

### 学生募集・高大連携から初年次教育まで

基調講演の役割分担

学生募集・高大連携 → 入試制度改革 → 入学前教育等 → 初年次教育等

桜美林大学・高原幸治 (前半)      京都工芸繊維大学・山本以和子先生 (後半)

スライド3

### 目次

- 2040年の市場予測
- 高大連携とは
- 「ディスカバ！」からの考察

スライド4

### 2040年の市場予測（18歳人口の減少と大学淘汰の現実）

現状維持は「座して死を待つ」に等しい。  
2040年までに偏差値48以下の大学群は市場から退場させられるリスクがある。

18歳の大学進学者数の推計（2025-2040）

Year	Number of students
2025	67.7万人
2030	62.0万人
2035	57.4万人
2040	48.4万人

△19.3万人減少

入学定員ショートと大学消滅規模

Category	Number
現行の総入学定員	63.0万人
2040年の18歳人口	48.4万人
入学定員のショート	14.6万人

中規模大学 約100校分の消滅に相当

スライド5

### 2040年の市場予測（18歳人口の減少と大学淘汰の現実）

Web広報？ SNS対策？ 留学生募集強化？  
入試改革？ 高校営業？ 塾営業？  
イベント改良？ **高大連携？**  
教育改革？ データ分析？ SWOT分析？  
大学案内刷新？ デジタルマーケティング？  
コンサル導入？

スライド6

### 高大連携とは（文部科学省の定義）

高等教育と中等教育の円滑な接続

目的：生徒一人一人の能力を伸ばすための、高校・大学双方の連携。

背景：高校教育の多様化と、大学レベルの教育研究への早期接触ニーズの増加。

具体的施策：

1. 教員間の交流・ネットワーク構築
2. 連携協議会の設置と実質化
3. 高校教員向け研修・大学教員向けFDへの相互参加
4. 大学施設や卒業生ネットワークの活用

スライド7

**高大連携とは（大学と高校の思惑のギャップ）**  
立場によって異なる「期待」の優先順位

**【大学の視点】**

「学生確保」 > 「意欲的な学生探し」 > 「マッチング」 > 「育成機会」

出典：マイナビ進学ラボ「大学と高校の思惑のギャップ」 https://mc.mynavi.jp/column/2023/06/connection/

スライド8

**高大連携とは（大学と高校の思惑のギャップ）**  
立場によって異なる「期待」の優先順位

**【大学の視点】**

「学生確保」 > 「意欲的な学生探し」 > 「マッチング」 > 「育成機会」

**【高校の視点】**

「学生確保」 < 「意欲的な学生探し」 < 「マッチング」 < 「育成機会」

「高大連携」は魔法の杖ではない。双方の目的のズレを認識する必要がある。

出典：マイナビ進学ラボ「大学と高校の思惑のギャップ」 https://mc.mynavi.jp/column/2023/06/connection/

スライド9

**高大連携とは（経営的・学生募集広報の戦略的な捉え方）**  
マーケティング・ファネルの考え方

認知拡大 → 個人情報取得 → 主催企画参加 → 出願 → 合格 → 入学

出典：1951→進学情報 進学ナビ202207-19510000 https://news.shingakunet.com/higher/2022/10/12-2022.html

スライド10

**高大連携とは（経営的・学生募集広報の戦略的な捉え方）**  
マーケティング・ファネルの考え方

認知拡大 → 個人情報取得 → 主催企画参加 → 出願 → 合格 → 入学

高校生の動向データ：  
 ・当初の検討大学数：5.69校  
 ・資料請求数：6.97校  
 ・オープンキャンパス参加校数：2.92校  
 ・出願校数：2.72校

初期段階（関係構築）で選ばれなければ、出願には至らない。

出典：1951→進学情報 進学ナビ202207-19510000 https://news.shingakunet.com/higher/2022/10/12-2022.html

スライド11

**高大連携とは（関係人口の創出）**

交流人口（観光客） → 関係人口（準構成員） → 定住人口（住民）

オープンキャンパス参加者（一過性） → 学習共同体への参加（継続的関与） → 在学生（所属）

出典：Hitebook

スライド12

**高大連携とは（考え方の整理・5W1H）**

<b>Why (目的)</b> 関係人口を増やす	<b>Where (規模)</b> どこまで広げるか	<b>What (内容)</b> 高大双方にメリットのあるプログラム
<b>When (時期)</b> 再構築のタイミング	<b>Who (体制)</b> 誰とやるか (学内・学外・外部委託)	<b>How (資源)</b> ヒト・モノ・カネの配分

出典：Hitebook

スライド 13

### 「ディスカバ！」からの考察 (Why, When, Where)

構想から始動までの間に考えた戦略と取り組みの実績

#### 戦略の変遷

- 2015年  
構想：偏差値ではない新しい評価軸の模索
- 2017年  
試行：プログラムの開発や運営を試行錯誤
- 2019年  
始動：専属コーディネーターを迎え入れブランド化
- Goal 『より早く、より速くへ』  
全国規模のプラットフォームの提供を目指す

#### 参加者数の推移 (2017-2024)

年	参加者数
2017	284
2018	996
2019	1,698
2020	2,542
2021	9,537
2022	20,865
2023	32,758
2024	31,332

スライド 14

### 「ディスカバ！」からの考察 (Who : 運営体制)

#### 事務局の特徴

- 入学部下だが、運営は100%業務委託
- 自治体の『指定管理者制度』モデルを採用
- 2019年：3名  
→ 現在：10名体制

スライド 15

### 「ディスカバ！」からの考察 (What : プログラム設計)

「Input」と「Output」という2軸のプログラム

#### Input: 探究的な学び

自らが学びたいことや、なりたい人に出会う。

#### Output: 言語化ワークショップ

自分が学びや経験を整理して、言語化する。

スライド 16

### 「ディスカバ！」からの考察 (How : エンゲージメント)

大学教員からの「問い」と大学生メンターの存在

## 正解のない問い × 大学生メンターの伴走

学問の最先端や社会課題からピックアップ

桜美林大学  
J. F. Oberlin University

スライド 17

### 「ディスカバ！」からの考察 (How : 展開と予算)

#### 高校出張プログラム (ディスカバ! for School)

#### 提供メニュー

- 探究オリエンテーション**  
高校1〜2年  
探究をはじめることについてワタクシしよう
- 探究レッスン**  
高校1年  
学問分野にもとづく探究テーマに挑戦しよう
- 探究発見ガイド**  
高校2年  
自分だけの探究テーマを見つけよう
- 総合・推薦型入試準備セミナー**  
高校2〜3年  
総合型・学校推薦型の大学入試に向けて準備をはじめよう
- 教員研修・保護者ガイダンス**  
学問分野にもとづく探究テーマに挑戦しよう

#### 予算戦略

新聞・交通広告予算を削減し、プログラム運営費へ転換 (Scrap & Build)

スライド 18

### 「ディスカバ！」からの考察 (入試へのルート設計)

関係人口の創出だけではなく、高大連携での取り組みを評価する入試のルート設計も重要

受験生一人ひとり異なる「これまで」を評価できるよう、多様な選抜方式を用意・改良

#### 主な出願書類

- 「調査書」
- 「入学志願書調書」
- 「探究学習報告書」 (1,600字程度の探究活動報告書)

スライド 19

**「ディスカバ！」からの考察（全国規模のプラットフォーム）**  
「ディスカバ！」のプラットフォームを開放し、全国規模での高大連携と関係人口の構築を推進



2023年より導入：  
「ディスカバ！」  
in 鹿城大学 (熊本)

2025年より関西、2026年には福岡で、  
個人参加向けの「ディスカバ！」を開催  
全国的な展開が加速

事例：崇城大学



・テーマ：食、がん、薬などの探究  
・期間：3月～8月にかけて継続的に実施  
・成果：修了生は、「探究活動アワード選抜」への出題が可能  
奨学金がもらえる「探究活動プロセス支援」への挑戦の  
導線としても期待

探究指導者育成プログラム「Bridge」  
(三菱みらい育成財団助成事業)



「探究」を支える教員・大人を育成し、  
支援側の関係人口も全国的に拡大。

探究コレクター 認定資格

© HotoBookLM

スライド 20

「高大連携」とは単なる学生募集の手段ではない。  
大学が社会・地域・高校と「関係」を結び直すための経営戦略である。




ご質問・お問い合わせ先  
takahara@obirin.ac.jp

スライド1

第31回FD・SDフォーラム 2040年の京都の大学  
第11分科会  
「高大連携をどう設計するか、特に学生募集・入試・入学前教育等にどうつなぐか  
～連携・接続・移行の今とこれから～」

高校から大学へつなぐ理論と実践  
トランジションを成功に導く実践デザイン



京都工芸繊維大学工芸科学部  
教授 山本以和子

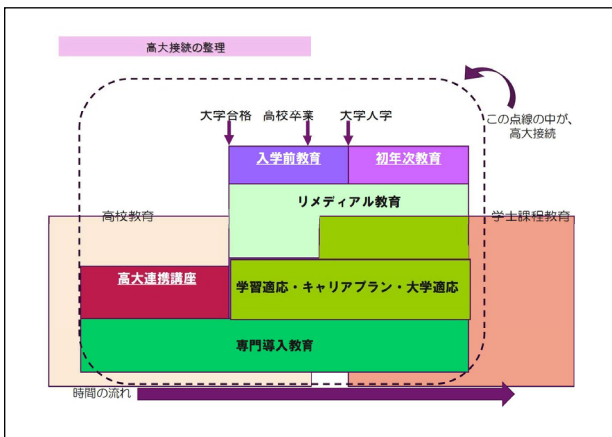
スライド2

第31回FD・SDフォーラム 2040年の京都の大学  
第11分科会  
「高大連携をどう設計するか、特に学生募集・入試・入学前教育等にどうつなぐか  
～連携・接続・移行の今とこれから～」

高校から大学へつなぐ理論と実践  
トランジションを成功に導く実践デザイン

- ・ 高大連携・高大接続・高大移行  
なにがちがう？
- ・ 高校教育と大学教育のちがいは？
- ・ なぜ、高大接続？ 高大移行とは？
- ・ トランジションを成功に導く  
実践デザインに向けて


スライド3



スライド4

高校教育と大学教育のちがいは？


小学→中学→高等学校への進学



連続した階段をのぼる

学校教育法 第6章 高等学校 第50条  
高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。

高等学校→大学への進学



ガルフ（溝・隔たり）を飛び越える

学校教育法 第9章 大学 第83条  
大学は、学務の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を開発することを目的とする。

中等教育までと高等教育では、そもそも教育目的が異なる


- ・ 高校までは、知識の伝達が中心で、**知識を吸収する場**
- ・ 大学からは、広い知識の伝達と専門領域の教育・研究を通じ、**知識を生産する場**

スライド5

大学生になれない？ 接続期の学生

■大学における初年次学生（新入生）の立場

- 自分の学習に責任をもつ学生となる社会化のプロセスに位置する
- 生涯学習の出発点に位置する
- 知的に自立することを促されている
- 能動的な学習者として扱われる存在



Craig McInnis and Richard James with Carmel McNaught. *FIRST YEAR ON CAMPUS*  
A Commissioned Project of the Committee for Advancement of University Teaching:  
Centre for the Study of Higher Education University of Melbourne, Australian  
Government Publishing Service September,1995

スライド6

大学生になれない？ 接続期の学生

近年の高等教育を取り巻く状況について -高大接続側面-

★学生は、

- ・ 知的なチャレンジの機会を欲している
- ・ 授業やコースに否定的な見解を持っている

★大学教員は、

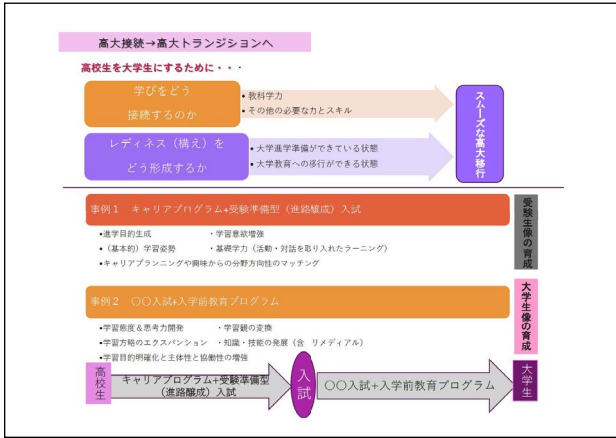
- ・ 70年代後期と比較して、学生の学習能力に不満を表明する
- ・ 学生の指導に時間がかかり、また学生の目的意識や応用能力の不足を感じている
- ・ 「遊ばなくては泳げない」式のマスやユニバーサル高等教育のシステムに合わない大学教員をもつ教員がいる

CAMCROSS and Richard James with Carmel McNaught (1995) First Year on Campus

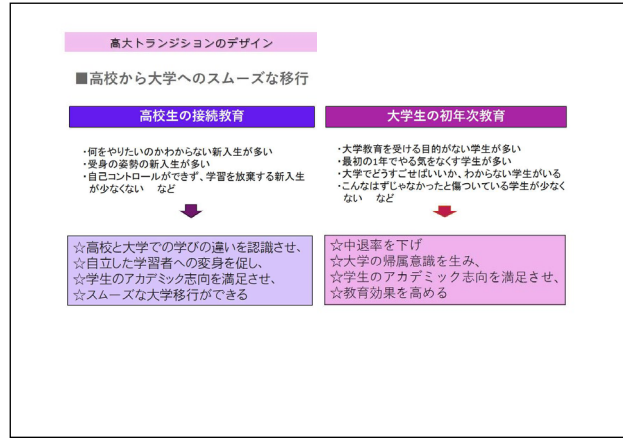
なぜ、入試で接続できたのか？



スライド 13



スライド 14



スライド 15

**高大トランジションのデザイン**

★学生は、

- ・知的なチャレンジの機会を欲している
- ・授業やコースに肯定的な見解を持っている

★大学教員は、

- ・自分の時代と比較して、学生の学習能力に不満を表明する
- ・学生の指図に時間がかかり、また学生の目的意識や応用能力の不足を感じている
- ・「薄れなければならない」式のマス高等教育のシステムにそぐわない大学教育観をもつ教員がいる

○ 今年のうちの大学の新生は「書く力」「読める力」がないと言う前に...  
彼らや彼女たちが持っている問題意識を、我々大人が引き出してこなかった、授業中おぼろしくしている方が多い。身動きが滞るために...

○ 今年のうちの大学の新生は「基礎学力」がないと言う前に...  
その「基礎学力」とは何かを問い直し、**「基礎学力」を高めるために必要な共通性を**大学教育や初等中等教育の関係者を含む社会で協働し、共有する必要がある...

子どもたちが自らのアイデアと発想で次世代を切り拓くことができ、創造性と公正・尊厳が両立する民主的な成熟社会に向けた（各大学との）アライアンスが重要。

そのためには、その大学で学生が成功するための**カリキュラムを明確化し開発が必要**と共に、**大学のサポートは、自立学習への挑戦を奨励するものであってはならない**

スライド 16

**3年次 大学入学選抜における好事例集**

京大大学「特色入試」選抜区分: A  
京大工芸繊維大学「ダビッチ入試」選抜区分: A  
奈良女子大学「探求力入試Q」選抜区分: A

スライド 17

**京都工芸繊維大学「ダビッチ入試」**

今期3年次入学選抜概要

アドミッションポリシー等との関係

実施体制

制度設計のポイント

選抜の仕組み

好事例認定委員会委員コメント

スライド 18

**制度設計のポイント**

ダビッチ入試は、進学と入学前教育を通じて、高校生から大学生になる 高大トランジションの橋を担っている。

出題資料で自己発見と目標プログラミング、進学意欲を高める。

進学では従来の学力検査や大学入学共通テストを踏まえて、**大学での学習環境を再現し、大学での卒業修了が可能かどうかを評価する。**

第1次選考では、高校までの基礎学力に新たな知識を構築でき、その理解と活用する力や論理性、表現力等を評価。第2次選考では、より専門知識の深堀りにおいて様々な教育活動での理解力や洞察力、協働性や創造性を評価。

合格者に対しては、高校からの学びと大学進学への橋（レディネス）が醸成されるよう、リディアル（88）だけでなく、**大学教育を体験する入学前教育を実施。**

内容は、「科目別化学」(大学独自のディジタル通信教材)、「大学研究の基本的な考え方の探究を学ぶ理工学基礎講座」や、PBによる協働性と問題発見・解決一発表のスキル獲得を学ぶ「グループワーク実践講座」、グループワークでの活動を促す「英語トレーニング」や「国際交流会」等がある。

入学後は、入学前教育を活かし、専門課程での基礎となる**専門力を修得し、外国語運用能力、TECH LEADERとしてのリーダーシップ及び文化のイデオロギアを育むこと**ができるよう構成された教育プログラムを実施。

※リディアル:  
大学教育を受け始める前と基礎的な知識等についての教育をいう、**接続教育**とも呼ばれる。

スライド 19

ダビンチ カレッジ・レディネスプログラム (ダビンチC Rプログラム) とは

多岐講座 | グループワーク実践 |

英語科目 |

英語4年制 |

高校生が 大学生になる

数学の講師による特別個別指導

文章表現の指導

スライド 20

What does it mean to be **"transition"**?

- ・高文接続期に大学進学レディネスが育成されている。
- ・スムーズな大学教育への移行が果たされている。
- ・1年次終了までに成績や単位取得、生活ともに順当な状況になり、休学・中退のリスクが低く抑えられた状態。
- ・高校生から大学生となり、大学の位人として定着している状態。

スライド 21

参考資料

合田哲雄 (2024) 「新学習指導要領と高大接続」  
 藤内未来, 山本以和子, 富山明華, 花堂宗祐子, 林寛子 (2025) 備産地にみる大学の適性性と入学前教育の実施状況およびその成果. 日本教育工学会  
 文部科学省 (2022) 委託調査「大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究」  
 文部科学省 (2024) 「急速な少子化が進行する中での将来社会を築いた高等教育の在り方について」中間まとめ  
 内閣府 (2021) 「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する実証イニシアチブ」中間まとめ  
 清水一 (2013) 大学の偏差値と進学率・就職率に関する予備分析. 社会科学系学部部会. 大経大論叢 64(1) : 57-70  
 立石慎治, 小方直幸 (2016) 大学生の進学と留年一その発生メカニズムと抑制可能性一. 高等教育研究 19 : 123-143  
 山本以和子, 内村浩 (2011) A.O.入試入学者の学習活動進捗による傾向分析. 大学入試研究ジャーナル 21 : 119-123  
 山本以和子, 花堂宗祐子, 林寛子, 富山明華, 藤内未来 (2024) 高大接続改革に係る入学前教育の実施状況と課題. 大学入試研究ジャーナル 34 : 182-189  
 Conley, D.T. (2007) Redefining College Readiness. Educational Policy Improvement Center  
 Craig McInnis and Richard James with Carnel McNaught (1995) FIRST YEAR ON CAMPUS